

カンバセレス文書について

新 倉 修

1

一昨年度、國學院大学では、いわゆるカンバセレス文書と呼ばれる手稿類を購入した。法律の世界では、カンバセレスは、フランス革命期にカンバセレス草案と呼ばれる民法典草案を起草した人として知られ、歴史的には、ナポレオン・ボナパルトを第一統領とするいわゆる統領政時代に、第二統領となった人物として有名であるが、その人となりはほとんど知られていなかった。そこでいくつかの文献を頼りに、まず、その人となりを紹介しておこう。⁽¹⁾

ジャン＝ジャック＝レジ・ド・カンバセレス (Jean-Jacques-Régis de Cambacérès) は、一七五三年一〇月一八日父ジャン＝アントワヌ (Jean-Antoine) と母マリ＝ローズ・ド・ヴァサル (Marie-Rose de Vassal) の間に生まれた。父は、南仏モンプリエの会計院の評議官でかつ市長であり、法服貴族 (noblesse de robe) の家系で、もともとは、バス＝セヴェンヌ地方の出身であるといわれている。

ところでこの地方は、フランスの中央山地からローヌ河流域の平野にかけてやや高い山地を形成するところで、ロゼール、ア

ルデーシユ、ガールの三県にまたがるセヴェンヌ国立公園がある。古代ローマの植民市であったニームや、香料貿易の集散地であり、すでに医学学校・法学校（一二世紀に大学となる）をもったモンプリエは、その南側に位置する。また文化的にも、セヴェンヌは、熱心な新教徒の居住するところで、ガール県の小村ミアレ（Miallet）には毎年九月の第一日曜日に、たくさんの新教徒が集まるという。というのも、カンバセレスが生まれる一世紀ほど前からふたたび宗教的寛容は反故同様になり、ついに一六八五年には、新教徒の法的地位を認めたナント勅令（一五九八年）が廃止され、宗教的弾圧が強まった。二〇万人の新教徒が外国に脱出し、他方、セヴェンヌの各地で反乱が起こった。そのうちでもっとも有名な事件が、一七〇二年から一七一〇年までつづいた「カミザール（Camisards）」の反乱である。これは、夜間襲撃するときに仲間であることの合図として、この地方のことは（オック語）で下着を意味する白いカミゾ（camiso）を着たところに由来する。このような大事件がカンバセレス自身にいくらかの影響を与えたのかは不明であるが、三歳違いの弟エチエンヌ＝ユベール（Etienne-Hubert [1856-1828]）は、兄の引き立てもあり、コンコルダートの翌年である一八〇二年に四六歳でルーアンの大司教となり、さらにその翌一八〇三年には枢密卿となった（もともと一八一五年の王制復古によって、その隆盛も終わった）。また、モンプリエの司教代理で司教座聖堂参事会員（chanoine）であり、三六歳の時にルイ一五世の面前で不品行を諫める説教を大胆に行ったという逸話が残っているアベ・ド・カンバセレス（abbé de Cambacérès [1721-1802]）は、叔父にあたる。このような背景にすでに、宗教というこの時代の伝統的な基本的価値をめぐる変転と王権・皇位という世俗的な権力とに対するジャン＝ジャック＝レジ・ド・カンバセレスの態度を解く鍵が隠されているのかも知れない。なお、異母弟に、一七九三年に一五歳で志願し、大佐として一八〇五年のオステルリッツ会戦に参加し、一八〇六年のイエナ会戦には將軍となったジャン＝ピエール＝ユベール（Jean-Pierre-Hubert, baron de [1778-1826]）がいる。その子がマリ＝ジャン＝ピエール＝ユベール（Marie-Jean-Pierre-Hubert, duc de [1798-1881]）とエチエンヌ＝アルマン＝ナポレオン（Etienne-Armand-Napoléon, comte de [1804-1878]）であり、エチエンヌ＝アルマン＝ナポレオンの子がルイ＝ジョゼフ＝ナポレオン（Louis-Joseph-Napoléon, comte de [1832-1868]）である。

ともあれ、ジャン＝ジャックは、法律を学び、一七七一年に一八歳で父の跡を襲って、会計院評議員となった。そして、革命

の勃発した年にはすでに三五歳になっていた。かれは、全身分会議の貴族身分会議に属し、選ばれて陳情書を書いたが、徴税問題・司法改革問題で手詰まりの状況を打開するために、ルイ一六世が渋々開催を同意した全身分会議の代議員（モンプリエ・セネシヨセの貴族区）には選ばれず、エロー刑事裁判所の所長になった。一説には、第二順位の代議員として選出されたが、この貴族区では代議員は一名しか選出することができなかったため、ジャン＝ジャックの当選は無効とされたといわれている。はるか七〇〇キロ北のパリで進行する革命の推移を気にながらも、糧食局長（président du bureau des subsistances）、市演説者（orateur de la commune）、ディストリクト代理官（procureur-syndic du district）、刑事裁判所所長などを勤勉にこなして、徐々に人気を集めていった。

革命の進展は早く、一七九一年九月にはフランス国王が裁可した最初で最後の憲法（いわゆる一七九一年のジロンド憲法）が發布され、諸国王のフランス包囲の中で、革命は急進化し、国王の退位をめぐる論戦が激化して一七九二年八月一〇日には、立法議会が国民公会の選挙を決定した。九月二日に開かれた国民公会第一回会議で王政の廃止が決まった。その国民公会には、モンプリエ選挙区選出の議員として参加している（九月六日選出）。有名な国王処刑の審議では、カンバセレスは、国王の間責動機については賛成しつつも、処刑について賛成であるとも反対であるともとれる発言を行い、結局、処刑の猶予に賛成の票を投じた。このとき、立法議会の友人カンボン（Cambon）とボニエ（Bonnier）の推挙を得たが、司法大臣に指名されることに失敗した。

国民公会はやがてジロンド派とモンターニュ派とが対立し抗争するに至るが、カンバセレスは立法委員会の職務に埋没するようになった。この期の代表的な作品に、非嫡出子（自然子 *enfants naturels* という）に相続権を認める報告書がある。また、民法の草案を起草した（いわゆるカンバセレス民法草案。一七六三年）ほか、メルラン・ド・ドウエ（P.-A. Merlin de Douai）とともに、あらゆる法律の法典化の作業を担当した。後年、民法典の起草については指導的役割りをはたし、コンセイユ・デタでの審議の半数以上について議長をつとめた。民事陪審制の採択はカンバセレスの提案によるとされている。なお、カンバセレスが学んだコレージュの友人に、ナポレオン民法典の起草で有名なポルタリス（Portalis）がいた。

一七九四年のテルミドル九日の事件以降、カンバセレスは政治的立場（反王党派）を鮮明にして、むしろ積極的に政治活動にコミットするようになる。公安委員会に参加し（一七九五年三月二六日）、委員長を勤め、スペインとの実効的な講和をはかった。

また公安委員会時代の出来事では、幽閉していた王太子と女王の釈放に反対し、「カペ家の者を幽閉しておくことについては危険がないが、これを国外追放するには危険が大きい」と言ったことが有名である。一部の歴史家によると、「彼（ルイ一七世）が存在しなくなったときでも、人は彼をあらゆる所で発見するであろうし、このような幻想が罪つくりな希望を育てるのに長い期間役立つことであろう」とカンバセレスが共和暦三年ブリュヴィオーズ三日（一七九五年一月二三日）に述べたことから推測させるように、テンプル寺院のいわゆる謎を解く鍵を持っていたのはカンバセレスだけであったといわれている。他方、革命委員会や革命裁判所の元構成員に対する訴追の動機には反対し、「公秩序を乱した」司祭に対して追放刑（banissement）を減じて要塞監禁（Déportation）とする案を採択させた。

「穏健派（modérantisme）」ではないかと疑われていたので、総裁（Directeur）には選ばれず、国民公会の議員であったという資格では五百人会の議員に選ばれた（結局、エロー県選出の議員となることになった）。さらに、一七九七年五月二七日（共和暦五年）の選挙では、エロー県から選出されず、パリのオラトリア選挙総会によって再選されたが、総裁府はこの選挙を破棄したため、政界を離れ弁護士業務に戻った。この間、民法典の起草作業に参加したが、カンバセレスの呼びかけにもかかわらず、民法典草案の審議は進捗しなかった。共和暦七年ジェルミナル（一七九九年四月）には破棄裁判所裁判官に選挙され、これを固辞したが、プレリアル三〇日（六月一日）のクーデタで立ちなおり、ブリュメールのクーデタ前（テルミドル二日＝七月二〇日）に、シエイエース（Sieyès）の推挙によりナポレオンによって司法大臣に任命された。

ブリュメール一九日のクーデタ（一七九九年十一月九日）には関係がなかったようだが、その恩恵に大いに預かった者の一人であり、ナポレオンの弟リュシアンとシャプタルの助言によって、第二統領（consul）となった。このとき、ナポレオンは三〇歳、カンバセレスは四六歳であった。その前夜に、ナポレオンはカンバセレスと食事をともにし、第二統領として、司法機関の組織

化、法律の起草、第一統領の不在の時には元老院とコンセイユデタの議長という重い任務を与えた。

しかし、カンバセレスの名が一躍歴史上に輝き出すのは、ナポレオン帝政時代である。カンバセレスは、ナポレオンのもとにおいて、とりわけ宗教協約(Concordat)および民法典の起草に貢献した。民法典の審議は一〇二会期を要したが、そのうちほぼ半数の会期で議長を務め、重要な条文でカンバセレスの聡明な示唆が及んでいないものはないとまでいわれている。

元老院議長、帝国大書記官(Archichancelier 共和暦十二年フロレアル十三日―一八〇四年五月十九日)、パルム侯爵(一八〇八年四月二四日に叙爵。一説には同年三月十九日)として、カンバセレスは、ナポレオンの忠実な、そして追従的な協力者であったといわれている。事実、ナポレオンが終身統領(Consulat à vie)に、ついで皇帝に昇るにあたって多大な貢献を行い、私的顧問会議委員、コンセイユ・デタ院長、帝国高等法院院長を務めたほか、帝室の事実上の身分管理官であった。また、事件や世論の動向に関する正確な報告書を毎日のようにナポレオンに送った。他方、モロー將軍の逮捕(一八〇四年。一七九一年に革命軍に志願し、一七九四年から一七九五年にかけてのオランダ遠征に従軍し、一八〇〇年にライン軍指令官として武功を挙げたが、報われることが少ないことに次第にナポレオンに反抗し、王党派と手を結んだ)やアンキアン侯爵の逮捕(一八〇四年三月。革命後一七八九年から亡命貴族軍に加わり、バーデン大公国に居留した)に反対し、スペイン戦争(一八〇八年三月二三日)やロシア遠征(一八一二年六月)の危険性を説き、マリールーズとの結婚(一八一〇年四月二日)には反対したが、最後はいつも折れた。

一八一四年に、カンバセレスは、ナポレオンの退位に賛成した(四月七日)が、その前に、皇后(マリールーズ)とローマ国王(ナポレオン二世。一八一一年三月二〇日の誕生とともにローマ国王に叙せられた)のパリ脱出の手はずを整え、プロワマで同行した。ナポレオンは、エルバ島脱出後のいわゆる百日天下のとき、カンバセレスを再び、司法大臣・元老院議長・帝国大書記官として遇することを望んだ。

王政復古の時代には、国王殺し(すなわち、ルイ一六世の処刑に賛成したこと)の故に追放され、しばらくベルギーに転居していたが、一八一八年五月に帰国を許され、死ぬまで六年間政界から引退して余生を送った。一八二四年六月一日、脳卒中で倒

れ、同月八日、パリで死去した。

カンバセレスの人となりについては、極端なみえぱりで、服装が異様であり、ゴテゴテと勲章をつけた服をきていたので、よく批判に晒されていた。しかも美食家であったことは、その晩餐が「美食家の大会」(モンガイヤール Montgaillard)とか「調理術の黄金時代」(カレーム Carême)と表現されていることから容易に推察できる。ラ＝レヴェイエール＝レポ(La Révellière-Lépeaux)がその『回想録』で述べている。

「真にそれに値する才能でよりも子供っぽい虚栄心の方で有名であって、繊細でしなやかで犀利でありながら、野心満々の人間であったカンバセレスは、国民公会を支配したあらゆる党派につきつきと接近した。しかし、物静かで自信家である彼は、そのいずれにおいても、まずもって自分自身を保持するのに必要な限りで、副次的には役割を獲得するために必要な限りでのみ、発言するにすぎなかった。」

また、ナポレオンは、『セント・ヘレナの回想』のなかで、カンバセレスは有能で熟練した人間だが、アンシャン・レジームの偏見と貴族制度への愛着が強い人間だと言っている。さらに、「あらゆる宗教的信念から自由であって、才能は素晴らしいが、公人としての性格はあまり誉められたものではない」という評言もある。

2

カンバセレス文書は、大きな帙で一二巻に分かれ、さらにその中でいくつかの帙に収納され分類されている。全体については、書肆クラウス社(H. P. Kraus)が作った英文の目録がある。その内容はつぎの通りである。

1 ナポレオン・ボナパルト宛てのカンバセレスの未公開書簡(1805-1814)。八二通の書簡その他六点。内容は、将官の人事に関するものから、一八一二年のマレー将軍事件(ナポレオン追放の陰謀)やロシア敗走に関するものまで含まれる。一七九三六年に発行された『カンバセレス書簡集』(Tulard編)を補うもの。とくに、将軍たちの横領事件、バルセロナでの殺人を採み

消した件、シェニエ家毒殺未遂事件など、スキヤンダラスな出来事に関するものとか、ナポレオンが遠征中の内政に関する報告（カン巴塞レスはナポレオンに寵用されていたので、遠征中の内政をまかせられていた）などが重要。

2 フランス皇帝ナポレオンおよびその家族の私的利害に関する文書。書簡およびその他の資料一七一点。皇帝一家の法律顧問としてのカン巴塞レスの役割を明らかにする文書。革命前の奴隷制復活の企みへの関与、政治的僚友の追落としのための策謀、ナポレオンとジョゼフィーヌとの結婚に至る経緯など、ナポレオンの私的側面を明らかにする資料。

3 フランス大革命におけるカン巴塞レスの経歴に関する文書。とくに、ルイ一六世の裁判および処刑（一七九二年）、聖職者、教育、警察、内政などに関する立法文書・政治文書。書簡およびその他の資料一〇七点。ルイ一六世の裁判に対する意見書草案が二点あり、拘禁中の国王を訪問した報告書、革命期における教育改革論（立法委員会に所属していた当時、非嫡出子に関する立法）、民事法・刑事法に関する資料、デュムーリエ將軍（国民公会時代に軍事独裁政治を企図して失脚）に関する資料およびその他の立法関係・行政関係の資料。

4 国民公会および公安委員会時代における立法文書・政治文書。書簡およびその他の資料七五点。処刑されたルイ一六世の後継者であるルイ一七世〔1793-1795〕の処遇に関する資料（この時、カン巴塞レスは公安委員会委員長）、国民公会議長の時代の資料（アシニア紙幣に関するもの、食料供給事情に関する報告書）などのほか、学術・芸術関係資料など。

5 立法議会および公安委員会時代における文書。とくに、ナポレオン法典として有名な（カン巴塞レス自身も起草者であった）民法典に関するカン巴塞レスの初期の作品。書簡およびその他の資料一六四点。国民公会時代の草案二点および執政時代における草案一点は、一八〇四年のナポレオン法典の前史を解明する重要な資料。その他、立法委員会や公安委員会の資料（ダントン失脚、ロベスピエールの支配など、政治的出来事に関する重要資料を含む）。

6 テルミドールのクーデタ前後（一七九四—一七九五年）における外交関係の文書。書簡およびその他の資料一二二点。

7 統領時代および帝政時代における立法資料・政治資料・経済関係資料。書簡およびその他の資料一三二点。ナポレオンの終身統領への選挙に関する資料、フランスとスイスとの関係に関する資料（タレイランの外交局への報告書など）、一八〇四年の

ナポレオン法典の草案、外国との通商や植民地統治に関する資料（うち八点のカンバセレス宛ての報告書は、ハイチの旧フランス植民地奪回の試みに関するもの）および一八〇一—一八〇二年の穀物飢饉に関する資料（その他、銀行、通過、財政に関する資料を含む）、宗教関係文書（五点がユダヤ教会関係、一三点がカトリック教会関係）、ならびに報道の自由・検閲など憲法関係資料および政治文書も多数含む。

8 皇帝令（カンバセレスに送付された、一二三の事項に関する二九三点の公式謄本。ナポレオンの署名・大臣の副署が付されたもの）、書簡およびその他の資料二三四点。ナポレオンのオーストリア遠征の際に、ウィーンで発せられた、ワグラム公爵領創設令（一八〇九年八月一五日付け）、エックミュール公爵領創設令（同日付け）などのほか、国事犯用の刑務所関係資料、百日天下時代の貴族院関係資料。オランダの内政・ロシア遠征に関する第三統領ルブラン（当時オランダ総督。一八〇一—一八一三年）からカンバセレス宛て書簡が四五二通とルブラン宛てカンバセレスの書簡草稿四八通、秘密結社フリーメイソンなどに関する文書。

9 称号、爵位、勲記（ナポレオンとカンバセレスは、旧王政派にとってかわる新貴族層を形成するために、新しい恩賞制度の樹立を重視していた）書簡およびその他の資料一五九点。

10 帝政時代後期（一八〇八—一八一五）における政治文書・法律文書・立法文書。書簡およびその他一一三点。スペイン戦争での敗退（一八〇八年七月二二日）に関連するデュポン將軍査問・懲罰関係文書二〇点、マレー將軍の武装蜂起未遂事件（一八一二年一〇月二二日）関係文書二〇点、エミグレ（亡命貴族）関係文書四〇点、その他、商事法関係文書、司法制度改革・法制関係文書、ナポレオンの王子・王女にかかわる経費関係文書および対間諜警察関係文書。

11 その他の文書。書簡およびその他の資料二五六点。一八〇六・一八〇七年におけるブローニュおよび英仏海峡の防衛に関するブリューヌ元師関係書簡（カンバセレス宛てブリューヌの書簡三〇点、ブリューヌ宛てカンバセレスの書簡草稿一〇点）、ブローニュの防衛に関するグーヴリオン・サン・シール元師関係書簡（カンバセレス宛て一〇点、カンバセレス書簡草稿二点）、オランダにおける要塞建設にかかわるマレスコ將軍関係書簡（カンバセレス宛て一九点、カンバセレス書簡草稿一八点）、

軍事警察・刑事事件にかかわるド・モンシー將軍関係書簡、外交にかかわるタレイラン関係書簡（二三点）、その他外交文書およびコンセイユ・デタ、最高裁判所に関する文書ならびに経済問題に関する文書（カード遊戲・羊毛・ワインに対する課税、道路・道路建設、鉱山、運河、石炭輸入、国内鉱物など）。

12 私的な非政治的な文書。書簡およびその他の資料五一点。カンバセレスの遺言の草稿（一八一五年におけるベルギーの逃亡生活以降一八二四年の死亡にいたるまで）およびカンバセレスの学位記、カンバセレス宛ての文学作品・哲学的手稿ならびにカンバセレスの甥（本コレクションの所有者）宛ての追悼文。

3

そこで、この膨大な手稿を含む文書のなかから、いくつか立法作業に関連する資料を簡単に紹介しておきたい。その本格的な検討作業は、法律・政治・経済・文学・歴史の各専門家を擁したチーム組み、書誌情報のカード化、項目索引・人名索引・年代別一覧表の作成などの気の遠くなるような作業を根気強く行い、また手稿のタイピングあるいはワープロ化というような基礎作業を経て、一般研究者の利用に耐える分類目録の公刊と同時に平行的に進めることが必要である。なお、現在までのところ先述の目録と現物との照し合せた段階であるが、目録に付せられた整理番号は、かなり大ざっぱなもので、いくつかの段階の手稿がひとつの整理番号を付けられている例があるので、さらに枝番を付すなどして、整理する必要があることを付記しておく。^(一)

まず、非嫡出子の相続権をフランス史上はじめて認めた立法である共和暦二年ブリュメール一二日（一七九三年十一月二日）の「婚姻外で出生した子の権利に関するデクレ」である。^(二)これに関する資料は、帙第一および第三を中心として本文書中にたくさんあり、カンバセレスの取り組みの深さを物語っている。このうち、帙第一と第三の文書を簡単に紹介しておく。

01-02-001 Anon., *Observation sur le Sort qu'on devoit faire aux Enfants naturels* / (France, early in 1792)

フォリオ判四葉八頁、青色の絹リボンで綴綴（口絵5）。無署名の手書きメモ、一頁目に「一七九二年四月四日受信」という書

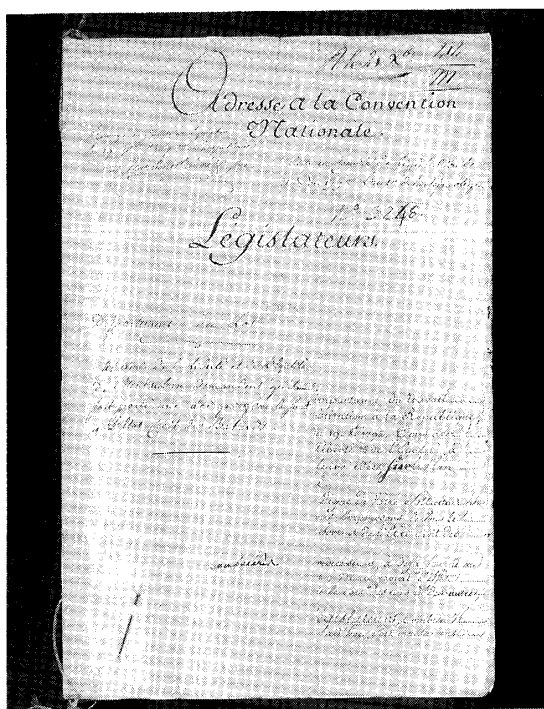
き込みがある。申述書だけで非嫡出子の認知を認めるという提案と非嫡子出にも完全な相続権を認めるという内容。後者は、後に立法化されたものにきわめて似た内容である。なか、一七九二年四月四日という日付が受信日を意味するなら、この時カンバセレスはまだ国民公会議員として選出されておらず、モンプリエにいた。

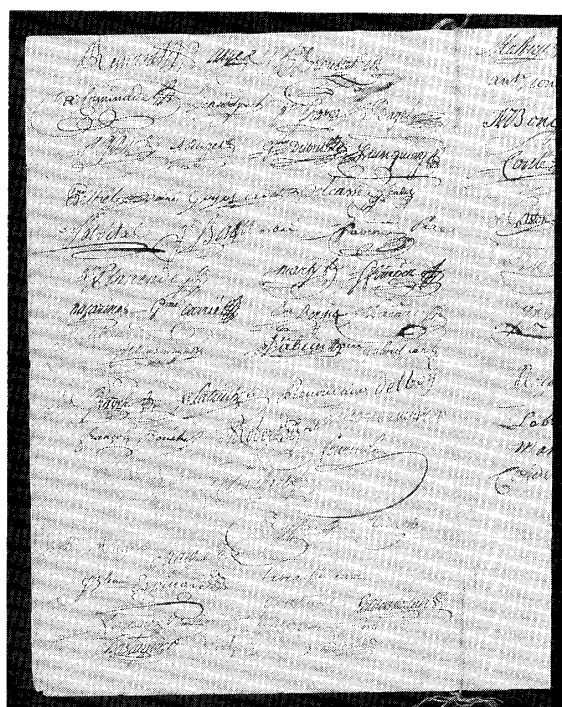
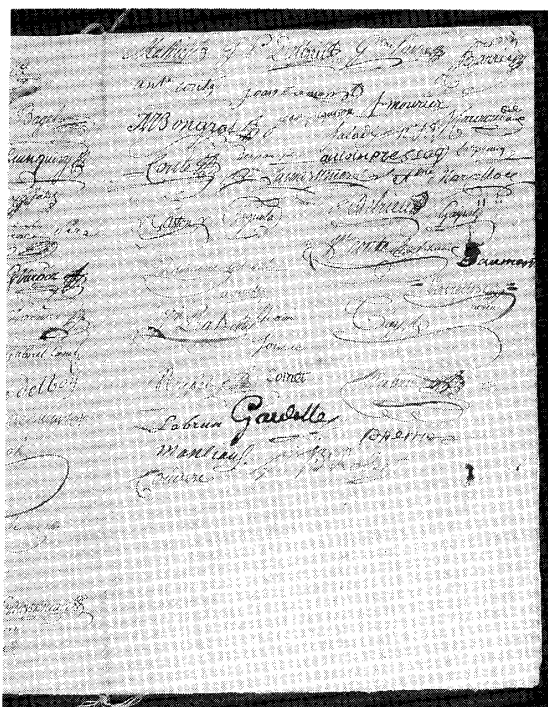
01-02-002 Villette, Philippe, *Mémoire aux Représentants de la Nation*... / Paris, (22 November 1792)

フォリオ判四葉七頁、無署名であるが、フォリオ判一頁の手紙 (01-02-002a Villette, Philippe / (22 November 1792)) が添えられており、内容から判断すると、「国民の代表へのメモランダム」もフィリップ・ヴィレットの手によるものと推測される。手紙の受信者は国民公会立法委員会である。メモランダムの内容は、非嫡出子のおかれている法的状態にふれ、申述書だけで非嫡子の認知を認めるという提案と非嫡出子にも完全な相続権を認めるという提案を含む。ピエール・ヴィアールのカンバセレス伝記には、この二週間後の一二月二日に、一〇歳の少年が国民公会に招かれて、共和国軍に血を捧げる代わりにルイ金貨二枚を捧げると述べ、「立法者の皆さん、養子縁組を布告してください。そうすれば、ぼくのように、数千人の不幸な者たちがあなた方を祝福するでしょう」と締めくくったことが紹介されているそうである。

01-02-003 Amis de la Liberté et de l'Egalité de Montauban, *Adresse à la Convention Nationale* / (Montauban, November 1792)

フォリオ判四葉五頁 (このうち、三頁は一五七名の署名書。口絵6)。「人民の代表ジャンボン・サンタンドレによって一一月一九日に立法議会に送付」という署名入りの書き込みがあり、「立法委員会一一月二日受理」という書き込みがある。ジャンボン・サンタンドレ [1749-1813] は、モントンバン出身の国民公会議員 (伝記に、L. Lévy-Schneider, *le conventionnel, Jeanbon Saint-André*, 2 vols., Paris, 1911がある) であり、イエズス会の学校に通ったが、カルヴァニストであった父によって退学





させられ、のちに二四歳で新教の牧師となり、当初はジロンドに近かったが、モンタニユアールに接近した。

01-02-004 Le François, C. A., Juge de Paix. (A. L. s. to the President of the Convention Nationale) / (Paris, 29 May 1793)

カンバセレスは、一七九三年三月四日に立法委員会委員長として「非嫡出子」立法の検討を任じられ、六月四日に報告書を提出した。この書簡は、パリのモリエール・ラフォンテーヌ地区の治安判事がその数日前に国民公会議長に宛てたもので、非嫡出子問題の実例とその処理方についてふれている。非嫡出子の遡及効についてのカンバセレスの提案に影響があったと思われる。

01-02-005 Cambacérès, Jean-Jacques-Régis, (Paper on existing ancient and modern provisions on natural children) / (Paris, January 1842)

クワルト判二葉三頁。ジャン＝ジャック＝レジ・カンバセレスの甥で相続人であるマリ＝ピエール＝ユベール・カンバセレスの手による手稿写し。内容は、一七九三年六月四日に国民公会に提出した報告書の抜書き。セーヌ・アンフェリウール知事デュポン・ドフォルト男爵に提出した原本の写し。

01-02-006 Cambacérès, Jean-Jacques-Régis, (Draft of speech) / (Paris, beginning of 1793)

フォリオ判六葉八頁半。秘書の手によるものに、カンバセレスの手による書き込みが入れられている。一七九三年六月四日の演説の草稿で、『Rapport et projet de décret sur les enfants naturels, présentés au nom du comité de législation par le citoyen Cambacérès, député de l'Hérault』の草稿と見られる。

01-02-007 Cambacérès, Jean-Jacques-Régis, (Draft document) / (Paris, June 1793?)

クワルト判六葉一一頁。カンバセレスの提案した法案の草稿と見られる。秘書の手による二八箇条の条文にカンバセレスがさらに手を入れている。

01-02-008 (Cambacérès, Jean-Jacques-Régis?), Observation de détails sur le projet de décrets sur les Enfants Naturels / (Paris, 1793?)

クワルト判よりやや大きい判七葉一二頁四分の一、右欄のみ記載。

01-02-009 (Cambacérès, Jean-Jacques-Régis), (Paper of notes drafted for a speech) / (Paris, summer of 1793)

クワルト判四葉七頁四分の一。未収録の演説草稿。総計三〇行に及ぶカンバセレスの自筆の書き込みがある。非嫡出子は血族関係が確実である限り嫡出子と対となるものとし、自由と平等についての無視を否認した。

01-02-010 (Cambacérès, Jean-Jacques-Régis), Nouveau Rapport sur les Enfants Naturels / (Paris, summer of 1793)

クワルト判六葉六頁。非嫡出子の相続権承認の遡及適用について、仲裁人による相続決定に関する比較的実行可能な計画に賛成する内容。

01-02-011 (Cambacérès, Jean-Jacques-Régis), (Manuscript paper comprising the first draft of an important speech) / (Paris, June 1793?)

クワルト判六葉七頁。相続権は自然法によって確保され、したがって国民公会が非嫡出子の権利として認めたものは革命以後にも適用されるという考え方を批判した内容。

01-02-012 Cambacérès, Jean-Jacques-Régis, (First Draft of a document, apparently proposing a decree-law for passage

through the Convention Nationale) / (Paris, June 1793?)

フォリオ判六葉六頁四分の一。非嫡子立法の条文が一九から二〇へ増えた過程を明らかにする資料。数人の手によると思われる書き込みがある。第一草稿。

01-02-013 (Cambacérés, Jean-Jacques-Régis?), Appendice du Titre 4 du Livre premier / (Paris, August 1793)

クワルト判二葉四頁。一五条からなる。次の文書の後に位置すると思われる。

01-02-014 (Anon.), Note sur les Articles Concernant les Enfants Naturels / (Paris, June 1793?)

クワルト判二葉三頁半。非嫡出子の定義が非嫡出子立法の他の条文の変更によって必要となる場合に採択されるべき代案を規定したもの。

01-02-015 Cambacérés, Jean-Jacques-Régis, (Document twice signed by Cambacérés in autograph) Dépouillement des pétitions relatives à la Loi sur les Enfants Naturels / (Paris, 19 January–15 February 1793)

フォリオ判八葉一〇頁。国民公会立法委員会の作業の「出発点」を画するもの。右欄には書記の手で節番号を付したもの。左欄には《Dépouillement des pétitions relatives à la Loi sur les Enfants Naturels》の表現がある別の書記の手によるもの。

01-02-016 Delacroix de Frainville, Observation au Comité de Législation sur l'article 9 du Tit 4 Liv 1er / (Paris, August 1793?)

フォリオ判四葉七頁半、編綴。パリ出身の弁護士ドラクロワ・ド・フランヴィルがカンバセレスに宛てた意見書。

01-02-017 (Anon.), (Memorandum or paper of advice presenting reasoned objections to the project for a decree-law of 4 June 1793) / (Paris, June–July 1793?)

フォリオ判四葉五頁。非嫡出子立法に関するカンバセレス案を批判したもの。遡及適用を認めるべきと主張する。

01-02-018 Auguste Brancas / (Endorsed in Cambacérés's autograph 'enfants naturels') / (Paris, 10 Septembre 1793)

クワルト判二葉三頁。カンバセレス宛書簡。「九月二一日返信」というカンバセレスの手による書き込みがある。

01-02-020 Jacques Poisson / Paris, 9 nivôse an II (29 December 1793)

フォリオ判二葉二頁半。カンバセレス宛書簡。「ニヴオーズ九日返信」というカンバセレスの手による書き込みがある。ジャック・ポワソンは、サン・ロ出身の国民公會議員。非嫡出子は父方からのみ相続するのか、それとも両系から相続するのかという点と、遡及適用はどこまで及びうるかという点について、問疑する内容。

03-02-054 (Cambacérés, Jean-Jacques-Régis?), Notes des diverses illégitimites des Enfants / (Paris, 1794?)

クワルト判二葉三頁。非嫡出子のおかれている状態について分析したもの。①非婚の親の子または婚姻した自由市民の子、②売春婦の子、③姦通から生まれた子、④近親相姦から生まれた子、⑤手続上の理由または婚姻禁止を理由として無効とされた婚姻から生まれた子、⑥秘密の婚姻など特殊な制度のゆえに非嫡出とされた子、⑦同棲中の親による臨終の際に成立した婚姻から生まれた子、⑧正規の婚姻から生まれたが、親の一方の身体的特性またはある事情の知っているがゆえにもしくは相当の期間同居していなかったがゆえに嫡出とされない子に分類する。

03-02-006 (Cambacérés, Jean-Jacques-Régis), Rapport et projet de décret sur les enfants naturels / (Paris, 4 June 1793)

フォリオ判六葉一二頁。非嫡出子立法に関する報告書と法案についての草稿。

03-03-001 (Cambacérés, Jean-Jacques-Régis), Notes pour le discours préliminaire du code / (Paris, August 1793?)

フォリオ判二葉三頁半(口絵7)。自然法の優位など、革命法の原理を述べたもの。民法典草案のいわゆるカンバセレス第一草案の序説の草稿。カンバセレスの手書き。フランス民法典の「初源」(サニャック)と位置づけられる。

03-03-002 (Cambacérés, Jean-Jacques-Régis), (Draft speech on behalf of the Comité de Législation supporting its proposals on the law of matrimonial property and on paternal recognition of children adulterously conceived) / (Paris, before 6 brumaire an II)

クワルト判二葉四頁。非嫡出子立法の一部をなす姦通から生まれて父親による承認を得た子についての演説草稿。しかし、立法委員会では「良俗の尊重、婚姻の信義、社会的礼儀が許さない」という理由でカンバセレスの提案を否定した。

03-03-003 Cambacérès, Jean-Jacques-Régis, (Report of a speech on behalf of the Comité de Législation, proposing law on the Administration commune des époux) / (Paris), 6 brumaire an II (27 octobre 1793)

クワルト判二葉三頁。夫婦財産制について、北フランスのゲルマン慣習法のようにひとつの法人格をもつ共通財産制をとるか、南フランスのローマ法のように夫婦が平等の権利をもつ別々の財産制(別産制)をとるかという問題にふれるもの。なお、日付の表記も一七九三年一〇月五日に制定された表記法に従って「ブリュメール」とせずに、「第二月」としている。

03-03-004 (Cambacérès, Jean-Jacques-Régis), Reconnaissance des Enfants par un père Engagé dans les Liens du Mariage / (Paris, 27 October 1793)

クワルト判二葉四頁。民法典第一草案第四編第九条の修正に関する演説草稿。

03-03-004 (Cambacérès, Jean-Jacques-Régis), Reconnaissance des Enfants par un père Engagé dans les Liens du Mariage / (Paris, 27 October 1793)

クワルト判二葉四頁。民法典第一草案第一部第四編第九条の修正に関する演説草稿。

03-03-007 (Cambacérès, Jean-Jacques-Régis), (Text of a speech proposing new articles (18-21) of the first Title of the Code civil) / (Paris, 27 October 1793?)

クワルト判二葉四頁。一七九三年八月九日に提出された民法典第一草案の修正に関する演説草稿。子の養子縁組みの許可は実親によって取り消されるべきだという国民公会の議論に関するもの。このような提案は賢明ではなく、不自然だと考えたカンバセレスは、代案として、養子の相続分を実子の相続分の三分の二とする案を示した。

4

カンバセレスの仕事は法典化作業全体に及ぶのであるが、その例をアトランダムに選んだ次のいくつかの文書で紹介しておく

う。

01-03-014 Anon., Code révolutionnaire. (France, 1794-1795)

フォリオ判二三三葉一一七頁半、三色の絹リボンで綴綴、八巻（口絵8）。未公刊の法典テルミドール期の共和国法の集大成。
01-03-015 (Cambacérès, Jean-Jacques-Régis?), Déclaration des Droits et des Devoirs, suivie du Pacte Social (1794-1795?)

クワルト判一九頁、表紙一葉は白紙、綴綴（口絵9）。一七八九年人権宣言の改訂をめざしたもの。

01-03-016 (Cambacérès, Jean-Jacques-Régis?), Observations sur les diverses dispositions des lois révolutionnaires contenues dans le recueil (France, 1794-1795?)

クワルト判一八葉三三頁、三色の絹リボンで綴綴。共和制フランスの行政および政府に関する法律の批判的検討を行ったもので、作者・日付は不明であるが、内容と形式からみてカンバセレスによるものと見られる。

01-03-017 Anon., Section Seconde. Du tribunal révolutionnaire (France, 1794)

クワルト判二七頁ないし五四頁、綴綴。第一編第六六条ないし第一一二条および第二編「革命的法律」の四一箇条。

03-02-013 (Cambacérès, Jean-Jacques-Régis), Projet d'opinion sur la question intentionnelle (Paris, before 20 vendémiaire an V (11 October 1796?))

クワルト判二葉四頁。演説草稿、カンバセレスの手による削除・挿入がある。五百人会法律分類委員会での異論（とりわけパストレ委員 [1755-1840]）に対する反論を試みたもので「刑事上の故意」を論じたもの。

03-02-013 a Cambacérès, Jean-Jacques-Régis, Projet d'opinion sur la question intentionnelle (Paris, 20 vendémiaire an V (11 October 1796))

クワルト判四葉七ないし一四頁。カンバセレスの手による「雑 (Matières diverses)」という書き込みがある。総裁政時代の刑事立法改革に関する文書。立法のための法律分類委員会における、「故意の刑事責任」に関する演説の草稿。

03-06-035 Carpéza\Observations sur l'Administration de la Justice criminelle et l'instruction par Jurés\Péronne (Somme), 18 vendémiaire an XII (11 October 1803)

フォリオ判四葉八頁。革命期の刑法典である一七九一年法典は、「革命は終わった」という統領布告(共和暦八年ブリュメール二四日、一七九九年十二月一五日)のもとに一八〇一年三月二八日に設置された委員会での全面見直しの対象とされた。この「刑事司法および陪審による審理に関する意見書」では、刑事裁判所の構成の改編を論じるほか、治安裁判所の改革に関して、作者カルペザ自身の手による半頁に及ぶ付記がある。

05-01-001 Anon, *Projet de loi sur les Nullités de la procédure criminelle* (Paris, 1800)

フォリオ判一六葉一〇頁、三色の絹リボンで綴綴。刑事手続における無効の問題を論じた建言書。作者・日付などは不明だが、一七九一年に設立された破棄裁判所(Tribunal de Cassation)や共和暦八年ヴァントーズ二七日(一八〇〇年三月一八日)の法律に言及している。

05-01-002 Lecourbe, J. F., *Observation sur la procédure criminelle par Jurés* (Paris, between 1799 and 1804)

大きめのフォリオ判一〇葉一七頁、綴綴。陪審裁判制度を通じて、刑事手続全般を論じた意見書。一七九一年刑法典から一八一年刑法典へ変わる時期に作られた共和暦四年ブリュメール三日(一七九五年一〇月二五日)の法律に言及するもの。作者のルクルブはセーヌ刑事裁判所の裁判官。

08-04-001 Bourguignon-Dumolard, Claude Sébastien, *Modifications et additions à faire au code pénal* (Paris, ((1811) and 14 May 1815)

フォリオ判八葉一六頁、ピンクの絹リボンで綴綴(口絵10)。一八一〇年刑法典の改正を促す立法提案。とりわけ刑法典の柔軟性の欠如を批判し、刑罰は犯罪者と犯罪の重大性に応じたものでなければならず、苛酷な施体恥辱刑(とくに烙印刑・体刑)について詳細に論じている。

08-04-001 a Bourguignon\Paris, ((1811) and 14 May 1815)

フォリオ判二葉一頁半。当時パリ上訴法院裁判官であったクロード・セバスチアン・ブルギニョン・デュモラール[1760-1829]のカン巴塞レス宛て書簡。ブルギニョン・デュモラールは、公証人の子として生まれ、一七八九年にグレジヴオダンのバイヤージュ(王制下での行政区画で地方官であるバイイは行政権と司法権をもつ。なお、ロワール河以南では同様の機構をセネシヨセ *sénéchaussée* と称した)の代訴士(*procureur*)であり、一七九〇年にはグルノーブルの市町村総代(*procureur de la commune*)の事務局長を勤め、帝政期にはパリで裁判官であった。《*Manuel d'instruction criminelle*》《*Dictionnaire raisonné des lois pénales de France*》など刑事法に関する多くの著作で知られている。

5

樋口陽一教授によれば、世界史的に見て一九八九年はこれに先立つ三つの八九年(*trois quatre-vingt-neufs*)の結合点と捉えられる。^四 それぞれは代表的な歴史的宣言をもつ。すなわち、一六九八年はイギリスの権利章典を、一七八九年はフランスの人権宣言を、一八八九年は日本の大日本帝国憲法をもつ、と。いずれも、「近代」という歴史座標におけるイギリス・フランス・日本のひとつの画期となった文書であるが、その内容には、共通性とともに、それぞれの「国」の特殊な歩みを刻した違いが、色濃く現われている。

フランス革命は、いずれにしても、世界史に巨大な足跡を残した。もう一つの世界史の里標である一九一七年が、東欧の新しい動きの中で、これまでと違った読まれ方をされようとしている現在、「現代」という時空に生きるわれわれとしては、自分たちの世界をどのような時的座標において構想するかということが、いまさらのように問われていると言ってよいであろう。

カン巴塞レス文書の位置づけも、このような視点から問題にされなければならないまい。

(一)カン巴塞レスに関する文献として、次のものがある。

- Godechot, *Chronique de la Révolution française*, 988 (ゴデショ著／瓜生一郎・山崎耕一・新倉修・長谷川光一・横山謙一 共訳『フランス革命年代記』日本評論社、一九八九年)。
- Napoléon Bonaparte, *Mémoire de Sainte-Hélène*.
- Aubriet, *Vie de Cambacérès*, 1824.
- Lamongon-Langon, *Les après-dîner de Cambacérès*, 1837.
- Massot-Reynier, *Eloge de Cambacérès*, 1846.
- J. Lhommer, *Cambacérès intime*, 1902
- Jean Thiry, Jean-Jacques-Réagis de Cambacérès, *Archichancelier de l'Empire*, Paris, 1935.
- Pierre Vialles, *L'archichancelier Cambacérès...* (Paris, 1908).
- F. Papillard, *Cambacérès*, Paris, 1961.
- É. Franceschini, *Cambacérès (Jean-Jacques-Régis de)*, dans : *Dictionnaire de Biographes français*, 1954, p. 948 à 950
- J. Tulard, "Preface" to *Cambacérès's Lettres inédites à Napoléon 1802-1814*, 2 vol., Paris, 1973.
- L. Chatel de Brancion, *Cambacérès et le personnel napoléonien*, *Mémoire de maîtrise*, Dijon, 1978 (sous la direction de J. R. Suratteau) .
- R. Marquant, *La Fortune de Cambacérès*, 1959.
- J. R. Suratteau, *Les élections de l'an V et le coup d'Etat du 22 floréal*, 1971.
- J. R. Suratteau, *Le ravitaillement de Cambacérès*, AHRF, 1956, p. 420-422.
- J. -L. Bory, *Les Cinq Girouettes*, Paris, 1979.
- J. Bourdon, *Le Rôle de Cambacérès sous le Consulat et l'Empire*. Bull. Soc. d'Hist. moderne, nov. 1928, pp. 67 sq.
- R. B. Holtman, *Cambacérès*, in : Samuel Scott & Barry Rothaus, *Historical Dictionary of the French Revolution, 1789*

-1799, Green Wood Press, Westport, Connecticut, 1985.

Bernard Chateboul, Cambacérés, dans : Dictionnaire Napoléon (sous la direction de Jean Tulard), Fayard, 1987, pp. 333 à 336.

J.-R. Suratteau, Cambacérés, dans : Albert Soboul, Dictionnaire historique de la Révolution Française, Presse Universitaire de France, 1989.

(二) 表記の内容は、文書整理番号、作者名、文書名および作成場所・作成年代であり、推定の場合はいずれも丸括弧をつけた。
(三) 野田良之『フランス法概説上巻』(有斐閣、一九五四年)六七〇頁、稲本洋之助『フランスの家族法』(東京大学出版会、一九八五年)五八頁および三二七頁。

(四) 樋口陽一「フランス革命と近代憲法」『講座・市民革命と法』(日本評論社、一九八九年)一二二頁以下および同『自由と国家』(岩波新書、一九八九年)。

(國學院大學法学部教授 新倉修)